

## ペリオ (Pelliot) 氏の中央亞細亞旅行

### — 敦煌石室遺書發見の次第 —

中央亞細亞殊にその東邊タリム (Tarim) 河の盆地は、此頃頃學者の注意を惹く様になつて來た、一體此地方は天山、葱嶺、崑崙などの山々で北、西、南の三方を圍まれて、東の一方のみがいはゆる流沙によりて支那本部の方に續いて居る、もとよりその大部分は砂地で、人類の生活に適しないけれども、三方の山麓と中央沙磧との間には、豊沃なる農耕地があるからして、古來住民は定住の生活を續けて居る、けれども沙漠の砂は種々な事情によりて絶えず周圍に擴がつて來るので、昔水草豊美の地も、今は全く砂に埋まつて、その面影をも残さない様な處が少くない、支那の古史に明らかに記されて居る此地方の國々は、此の如くにして現今地下幾尺の下に埋没せられて居る。由來此地方は昔から主としてトルコ民族のよつた處であるけれども、支那、印度、波斯、西藏及び北方諸民族などの中央に位して居るからして、始終此等諸強國の主權に支配せられたのみならず、南方に海路の開ける迄は支那と西方諸國とは專ぱら此地方を経て交通したからして、従がつて古來種々の系統をひいた文化がこゝに行はれた、佛教が支那に來て全盛を極むるより以前既にこの一帯の地は佛教國であつた。大立物の羅什三藏などもこゝから支那にひつぱられたのであることは誰も知つて居る、東からする支那の文化は勿論のこと、西方の祇教も摩尼教